



Salamander
in
the circle

第六章
脱走巨人

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

レル・・・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長

ヘルガ・・・・・・・・・・ 〃 〃 ・王女

マミヤ・・・・・・・・・・ホシナ族の娘

イリチヤ・・・・・・・・・・ヒューダーが名付けた少年

コタエ・・・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官

スクナ・・・・・・・・・・コタエの兄

目次

脱走巨人

96.

97.

98.

99.

100.

101.

102.

103.

104.

105.

107.

108.

109.

110.

111.

第六章のあとがき

奥付

脱走巨人

96.

「もう少し——もう少しで国境を越えます！ ですが——隊長——」操縦士は妙に静かな口調で言った。

「どうした！？」嫌な予感とともにレルは応じる。

「あれは——」

険しい岩山の連なりの頂上を結んだ線がケストル-エウメロスの国境だ。エウメロス側の方が幾分なだらかで丈の低い草地も見える。操縦士はそのエウメロス側を指さしていた。そこに動く物があるのだ。

「——巨人族！」

「ひとり、いや、一体ですね——こんなところで何をしてるんでしょう——」

「さあね」

何をしてるにしても、ケストルの追撃を振り切ってエウメロス側に墜落なり不時着なりしたところで、そこに巨人が待ち構えているのだ。レルは金髪をかきむしろうとした。王女の手を取りたくても彼女の片手はマミヤの手を握り締め、もう片方はコタエに握り締められている。

その時、機体がぐらっと傾いた。操縦士がケストル機の上方占位をさせまいと、進路を操作したのだ。それでエウメロス機は地表にいる巨人の顔面が見える位置になった。航空機搭乗初体験のマミヤは悲鳴を噛み殺しながらおそるおそる窓の外を見る。

マミヤがなにか叫んだ。しかし、航空機のエンジンも岩山の頂上と迫るケストル機の両方を避けようと金切声を上げていた。

レルは心を決めた。王女を護る以外に自分にできることがあるか。自分のマントを脱ぎ、王女の頭から被せ、その頭を抱きかかえた。命に代えても！ 彼は心中で叫んでいた。貴女は僕が護る！！

いくつかのことが同時に起こった。コタエがはっと顔を上げ、マミヤの握られていた手がすっぽ抜けた。操縦士が叫んでいる。「やられた！！」そして機体を揺るがす衝撃と窓の外の閃光。

97.

『レル！！』

いきなり耳元で名を呼ばれてレルはびっくりした。機体は傾き、傾いた側に体が押し付けられて立ってられない。せめて王女がどこかに頭をぶつけないよう、被せたマントの上から体ごと覆いかぶさり、彼自身おそらく痣だらけだ。

『レル！！』、とまた呼ばれた。『航空機が落ちる！！　そこから離れて！！』

この声は――

「イリチャです、レルさま！！　マミヤは私が！　あなたはヘルガさまを！！」

コタエが叫びつつ、昇降扉に開いた手の平を差しつける。すると、ばんっ、と激しい音と共に扉が吹っ飛んでくるくと宙を舞っていき、猛烈な風が吹き込んできた。あれ

これ考えているひまはなかった。レルはマントごとヘルガを抱き上げて風が吹き込む戸口へと転がるように走った。また機体がぐらっと傾く。かなり下の方に山々の連なりが斜めになっているのが視界に入る。

『レル！！ 跳んで！！ 受け止めるから！！』

彼は背後に叫んだ。「コタエさん！ マミヤを頼みます！！」 コタエの声がなにか叫び返してきた時、彼は機体のふちを蹴り、虚空に向けて跳んでいた。王女を包んだマントがはためく音と風切り音。空の青と山肌の緑色の二色しか目に入らない。エウメロス側だ。マント越しに王女の体温を感じる。天と地の間でふたりきり。こんな状況のなかで彼は、幸せだ、と感じている自分を笑った。

しかしそれはほんの一瞬のことだった。視界を白いものがすうっと横切った。航空機の機体のたぐいではない。もっと——軽くて速い——次の瞬間、それは彼らの真下にいた。

「イリチャ！？」

白い羽毛がレルたちの落下を空中で受け止めた。衝撃はほとんどなく、まるで雲に乗っているような浮遊感。だが、人間ふたりを背中に乗せたとたん、翼竜の高度はぐんと落ちた。

『レル！ 姿勢を低くしてつかまってて！ 操縦士のお兄さんを助けなきゃ！！』

いわれるまでレルは操縦士のことを忘れていた。落ちる機体を避けて旋回した翼竜が、脱出した操縦士の襟首を辛うじてくちばしで引っ掛けてつかまえる。

山頂のケストル側で何かが——全員脱出して無人となったエウメロス機と、介入してきた翼竜に気を取られたケストル機が、衝突して爆発。砕けた機体の骸が燃えながら、翼竜の背に伏せたレルの頭上を飛んでいく。それらがまき散らした火の粉が羽毛のあちこちに落ちる。レルは滑り落ちそうになりながら夢中で手の届く限りの火の粉を払いのけた。

98.

翼竜は三人もろとも地上に転がった。重い物を運ぶようにはできていないのだ。三人は草地に投げ出され、翼竜は足掻きながら変身を解く。操縦士が絶叫する。彼の見ている方向にコタエとマミヤが着地している。その向こうの岩陰から——巨人が現れた。

イリチャは草地に足を滑らせながら走った。巨人はコタエたちを見つけて躍りかかろうとしている。

「イリチャ！！」レルが叫び、自分の剣を鞘ごと放り投げた。ヒューダーをさえ打ち負かしたイリチャならば、もしかしたら巨人にも太刀打ちできるかもしれないと、そんな思惑からではない、ただ夢中で剣を託したのだった。ところが。

「だめ——！！」

マミヤだ。

「だめよ、やめてっ！！ やめて——！！」

イリチャの真正面でマミヤが両手を広げて踏ん張っている。しかしマミヤの背後から巨人が——

イリチャはいったん受け取ったレルの剣を抜かずに手放し、なにか小さな塊を右手につかんだ。そしてマミヤの一步手前で踏みとどまり、振りかぶってそれを突っ込んでくる巨人の顔面めがけて投げつけた。

ばふっと鈍い音。いっときおいて、巨人は絶叫した。凄まじい悲鳴だ。それが山々に

何重にもこだまする。墜落する機から脱出した者たちは一人残らず耳をふさいだ。聞くに堪えないこだまがいつまでも鳴っている。

(ああ！ 災難災難、また災難！) レルもコタエも、操縦士も、そう思った。

99.

巨人はと見れば、馬鹿でかい手で顔面を覆って地面を転げまわっている。絶叫をまき散らしながら。

イリチャはその凄まじい有様をぼう然と眺めながら、その場にしゃがみ込んで膝をつく。緑の草地に赤いものが見える。一見、血のように見えるが液体ではなかった。赤いものは粉末だ。

横から誰かの手が伸びて、赤い粉末をそっと指先にとった。手入れの行き届いた美しい指先。

「これは——香辛料では——」

「——香辛料？」 「——香辛料？」 「——香辛料？」

「トウガラシだわ。お料理の風味づけに使うの。ずっと南の暖かい土地、メッサナの特産品です」

うわーっと叫んだのはイリチャだ。「まちがえちゃった！ 黒曜石のカケラじゃないんだ！ これ、コモラさんの！ どこかで入れ違っちゃったんだ！！」

「じゃあ——きみが黒曜石のつもりで投げたのはトウガラシ？ あの巨人はトウガラシ

の粉を浴びて痛がってる、と——？」

レルは言いながら体が震えた。こみあげてくる笑いの衝動で。

「な、なんだかよくわかんないけど、ケガさせたわけじゃないの？ 痛がってるだけなの？」

「食材の一種らしいですね、害はなさそうです」

「で、でも、ホントは黒曜石のカケラを投げるつもりだったって言うの！？ なんてことするのよ！！ あんなもの顔にぶつけられたら、痛いじゃすまないわっ！！ 血みどろのぐしゃぐしゃよっ！！」

「だ、だから、投げなかったんだから、いいじゃないか！！ だいたい、ぼくはマミヤたちが追っかけられてると思って！！ 助けようとしたのに！！」

「……あ、そうだったの」

「でも、マミヤ……あの巨人は……」

「ええ、まちがいないわ、何度も会ってるもの。あれはダイドラボッチよ！ ……けど、情けないわねえ、あんなにひいひい泣いて」

「そんな、かわいそうですよ、マミヤ」 やんわりたしなめられてマミヤは素直に「はい」と首をすくめる。「上等のトウガラシはとても刺激が強いです。どうやら目に入ったみたいね、洗い流すのがいちばんだと思うのだけれど」

「あの岩山の向こうに水たまりが見えたわ。あそこで洗ってあげましょう」

コタエはマミヤとイリチャを促して立ち上がる。

「え、ぼくも？」

「いいから。いっしょにいらっしやい！」

100.

空から見た時、水たまりにみえたそれは、山の中腹にできた、火山の噴火跡に雪解け

水が溜まったものだった。適度な深さがあって巨人の水浴びにはちょうどよく、巨人は清潔な冷たい水で自分で顔を洗った。

コタエとマミヤは丘の上に並んですわり、それを眺めている。巨人の水浴びなんて面白くもなんともないイリチャは「向こうへ行っていい？」と聞いたがふたりに睨まれた。

「なんで！？ ここにいてもしょうがないじゃんか！」

「しょうがなくありません」「気を利かせなさいよ」

「????」

そうこうするうち、操縦士がてくてくとやって来た。イリチャ以外の三人は顔を見合わせて、ふう、と息をついた。

「コタエさんて、すごいわ！ ケストルの王様の魔法をいともかんたんに解いちゃうんだもの！」

マミヤにそういわれ、コタエは黙って微笑し、首をふった。

(解けなかった……解く手がかりさえみつからなかった……でもあの時……)

暗闇の中で、ヘルガの自我がもがいていた。時を追うにつれて少しずつ弱くなっていく。レルを安心させようと啖呵をきってみたものの、コタエは焦らずにいらなかった。手がかりがみつからないのだ。その闇を、外から切り裂いた光。(あれは……)

ヘルガは溺死寸前だった。もういつとき遅ければ、完全に闇に沈んでいたはずだ。
(あの光は……)

「私にはたいしたことはできません。どんな力もじつはたいしたことではないのです。
ひとの想いの強さにくらべれば」

巨人の水浴びが済んだころ、マミヤは丘を下って様子を見に行った。故郷の島からいなくなったダイドラボッチとこんなところで再会できるとは、思ってもみなかった。

ちょっと痩せたかしら、と思う。マミヤの一族は彼ら自身が育てている野菜や山で狩った小動物を定期的に届けていたが、それらはいわば、お供えのようなもので、実際はなにを食べているのかよくわからなかった。無理やり連れて来られたのだから、食べるものも変わっただろうし、足りていないのかもしれない。

「おまえは、ひとりなの？」マミヤは尋ねた。身振り手振りでかわす会話だ。

ダイドラボッチは、そうだ、とうなずいた。しかし、なぜこの場所にいるのかはわからないようだった。

「単独行動なのか。それとも群れとはぐれたのか。もし、群れが近くにいるのだとしたら、我々がここにいるのは危険だ」

「——レル・ヴァリス！？ こんなとこでなにしてるの！？」

「え？ 巨人の様子を見に」

マミヤは額に手をあてて天を仰いだ。

「なんなのよー！ あたしたちがせっかく——」せっかくふたりきりにさせてあげたの
にというのは飲み込む。たしかに彼らの国を襲ったという巨人の群れの一団が近くにい
るかもしれない、そう考えたら、のんびり水浴びなど眺めている場合じゃあないのだ。

夕暮れの空を白い鳥が舞っている。レルは指さし、「イリチャに偵察を頼んだ」、と
言った。

101.

「あれは、なんなの？」マミヤが尋ねる。「鳥？」

「いや、鳥じゃない。竜の一種だよ」

「……きれいねー……」

「ああ。そうだねえ」

「イリチャ、って、さっきまでそこにいた、あの子？」

「そう」

「あの子、竜だったのね」

「そうだよ。ああ。イリチャという名はヒューダーがつけたんだよ」

「ヒューダー……」マミヤは、はっとした。「闘技場でヒューダーとやり合ってた、あの子ね！ あらー。なんでヒューダーが名付け親なのよ」

「彼が名無しだったから」

「ふうん？ あ、そうだわ！ 私がヒューダーに投げた、あの……」

「ダーヴェ様の水晶の眼鏡ね、私が預かって解析させていただきました。おかげでいろいろわかったんですよ」

いつの間にか、コタエもヘルガも、操縦士もまわりに集まってきていた。

「で？ ヒューダーはどこに？ あなたたちとっしょじゃないの？」

「それはイリチャに聞いてください。彼が知っているはずだから」

偵察を頼まれたイリチャは、喜んで空に舞い上がり、周辺一帯を何度も行ったり来たりして念入りに地上の様子を調べた。森林限界を超えた険しい山岳地帯で、あたりに動く物はいっさい見当たらない。危険なものはいそうもないが、脱出も困難に思われる。そんな中、とにかく一夜を明かさねばならない場所として水場が近いというのは天の助けかもしれなかった。

一行が放り出されたあたりは国境付近で、西の方角に切り立った岩山が断崖のように険しく聳えている。こちら側からも向こう側からも頂上を超えることは不可能だろうという険しさだ。が、エウメロス側の崖下は嘘のようになだらかに広がった緑の草地だ。

森林限界を超えているということはかなり標高が高いわけで、太陽が西の山頂の向こうに行ってしまうと気温がぐんと下がってきた。ヘルガが身に着けていたのは祖国を出発した際の装束で、季節柄、薄手のものだった。もちろん高山で着るものではない。そこで操縦士は自分の制服を脱いでいそいそと王女のお尻の下に敷き、近衛隊長はいそいそと自分の制服を脱いで王女の肩に着せかけた。

マミヤは、まるでお姫様扱いだわと思ったが、彼らのお姫様なのだから当然である。

102.

なにもないところに、赤々と、火が燃えている。

焚火をしようにも燃やせるものもなく、無人の高地で明かりもなく暖もとれずに一夜を明かすのか。しかし燃やせるものがない。と堂々巡りをしていると、イリチャが、ほい、と手の中から火の玉を取り出した。火の大きさ、明るさ、温度、いずれも調整は思いのまま、自由自在に変えられるのだった。

「あんた、魔法使いだったのね！」マミヤに感心されて、イリチャは嬉しそうだ。「ダ

イダラボッチにも作ってやってくれる？」といわれ、大きな火の玉を持って行ってやると、巨人は手をかざしてうっとりとした。

この巨人は、いわば、脱走兵だった。行軍のさなかに病気になったふりをして、放置されるよう仕向け、一行から離れたのだという。そう、細かなことを聞き出したのはレルだった。

巨人と話ができるとは！ そのことに一番おどろいたのはレル本人だった。世界の果ての島にいる時に遠方のカール王子と遠感で繋がることのできたのを思い出し、巨人に試してみたのである。そこで、巨人もまた話したがっていることを知ったのだった。

「彼はずっと自分ひとりきりだと思っていたから、仲間が大勢いるのを知って、一時は喜んだ。でも、すぐに失望した。仲間たちに馴染めなかったんだ。考えることも食べ物も、なにからなにまで、全然違っていた。いっしょに行動するよう強要されたが、耐えられずに脱走を思いついた。行軍中に毒草を食べたんだ。一昼夜で毒が消える植物だということを知ってたのさ。しかし、ほかの連中はそんな知識は持ってない。毒で苦しめる仲間を見捨てて行ってしまった。毒にやられたものを食べると、自分にも害が及ぶくらいのことは知ってたんだ」

マミヤはダイダラボッチ以外の巨人族が何を食べているのか、初めて知った。全身総毛立ち、嫌悪とショックで胃がひきつる。胃液がこみあげて吐きそうになったが、コタエが背中に手をあててさすると嘔吐感はましになった。ヘルガはそんなマミヤを心配げに見やり、「巨人族の本当の脅威はそれかもしれませんね」とつぶやく。

レルは言った。「バイスロイは、巨人族の操作を止めるよう、ケストルと交渉するつもりなのですが……僕は……そんなことが果たして可能なのか。甚だ疑問なのです」

一同は黙ってそれぞれの視線をレルに向けた。

「巨人族を操作しているのはケストルではない。別の何かです。ヒューダーはそれを追っている」

「バイスロイはそのことを知っているのですか？」尋ねるヘルガの声には若干、非難めいた響きがある。レルはいったんおもてを伏せ、それから王女に目を当てた。

「确实だという証拠はないのです。バイスロイもそう認識しています。しかし、殿下、エウメロスが国土のほとんどが使い物にならなくなり、国王陛下は亡くなられ、王位は空位。今、ケストルが殿下を伴ってエウメロスを訪れば、エウメロスは確実にケストルのものになってしまうでしょう。帰るところがない黄金門の皇帝一族もろとも。我々は、バイスロイも、それを恐れた。だから殿下にお帰りいただくことを最優先したのです」そうやって彼は深く頭を下げる。「殿下はもしや——バイスロイが殿下の身代わり」にケストルに残ったとお考えならば、それは違います。彼は目的があって自ら乗り込んだのです」

103.

操縦士は墜落する機から脱出する際、本国に救難信号を発していた。「受理されていれば、どのあたりから発せられたものかわかるはずなんですが……」巨人族襲撃と避難の混乱の中で多くの物資が失われている。航空機もそのひとつで王女を迎えに行くのに二機がやっど。護衛の機がつけられない有様だった。地下シェルターには有事のためのさまざまな機材が揃っていたが、使える人間が少ないのだ。技術者も、知識も、不足していた。

それでも、レルはカール王子と連絡がついていて王女が無事であることは伝わっている。ただ、正確な位置までは伝えることができなかった。

「私が。」コタエが控えめに名乗りをあげる。「お連れしましょう。一度にふたりまで

なら大丈夫です。二往復か三往復することになりますが」

レルは黙ったままコタエを見る。上級賢者なみの力の持ち主だが、力は無尽蔵でない。世界の果ての島からエウメロスへ向かうのに洋上で一回、陸地で一回、休憩をとって来た。能力そのものというより、体がもたないのだ。休んで充電する必要があるのだった。彼女は、「肉の身はなかなか難儀なものです」と言っていた。力を使って二往復も三往復もして大丈夫なのかと、レルは思う。そんなレルの目を知ってか知らずか、コタエは平然としている。

そして、ひとつ問題がある。脱走巨人。ダイドラボッチである。この巨体を移動させるのはさすがのコタエにも無理だった。が、マミヤは、ここへ残していくなんてできないと、断固首を振る。いっしょにいるというのだ。

「迎えがきているのですよ、マミヤ。あなたはおくにへ帰るべきでは……」ヘルガはヘルガで、ケストル-エウメロスのトラブルに、他国人のマミヤをこれ以上巻き込みたくない。しかしマミヤにもどうするのがいいか、わからなかった。「かわいそうに。ダイドラボッチ。見ず知らずの所で、食べたいものも食べられず、ひとりぼっちだなんて。あたしだったら、耐えられない」

「ひとまず——明日、山を下りた方がいい。ここには食料になるものがないし、いつ天候が変わるかわからない。巨人族の軍団は北東の方角へ向かっていたというから、エウメロス占領部隊の増強に間違いない。だから、きみたちは逆方向の南へ向かったらどうだろう。森林地帯を山沿いに南へ進んで、様子を見るんだ」

「そう、それが一番かもしれません。して、レル、エウメロス占領部隊の増強、とは？」

「——移動中の巨人族の軍団はかなりの規模なのです。カール様には伝えてありますが——ダイドラボッチによるとその数、万を超えます」

104.

あまりの数に皆は絶句した。一万人超の巨人の群れ——

動転したヘルガは口が回らない。「そ、それは本当ですか——」

「ダイドラボッチに数の把握が正確にできているならの話です。あるいはもっと多いかもしれません」

「——な、ならばこんなことをしている場合では——」

「今の我々にはなにもできません。殿下、どうか落ち着いてください。搭乗機をやらせ、ここに脱出できたからこそ知りえたことなのです。巨人の軍団はもう五日ほど前にエウメロスに送り込まれたらしい。我々が殿下返還をケストルに打診する前に、彼らはエウメロスに入っていたことになる」

「それでも——私は行かなければ——」

「今宵はコタエどのの体力が十分ではない。ケストル王の魔法を解くのに消耗してしまってる。一晩休んでもらわなければ、無理です」

マミヤがこっそり、イリチャをつついた。（あんたはどうなのよ？ 空飛べるんでしょう？）

（ぼくは場所を知らないんだよ。ここへ飛んでこれたのはマミヤが呼んでくれたからさ）

ヘルガとコタエはふたりでレルのマントにいっしょにくるまり、眠ろうと努力している。イリチャは眠るのに邪魔にならないよう、火の玉の明るさと温度を調整する。すぐ近くでダイドラボッチが横になって手枕でうとうとしている。彼は軍団のお仕着せらしい服を身に着けていたし、水浴びをしたおかげか、体臭はほとんどなかった。せいぜい野生の匂いである。遮蔽物がなにもない高地、巨人とはいえ生き物がそばにいるのはありがたいとレルは思った。彼の体温と生命力の放射が温もりをくれるのである。マミヤの一族は彼を守り神のように慕い、大事にしていたというのが、わかる気がする。

(なんとか……くにへ帰してやりたい……)

カールと連絡をとりつつ、考えねばならないことが山積して、眠れそうにない。なんと
といっても、巨人のいびきが騒々しいのだった。

105.

燃える火の玉を眺めながらレルは一心に何事か考え込んでいる。操縦士と交代で寝ず
の番である。ふっと人の気配がして、誰かが隣に腰を下ろした。

「殿下！ どうなされたんです！？」

「眠れなくて」ヘルガはちょっと苦笑する。巨人のいびきのことを言っているのだっ
た。「彼も疲れているんでしょうと、コタエさまが言ってました。夜中の山中で眠るの
に騒々しい音を立てていたらぜったいにほかの生き物の注意を惹くはず、普段はこんな
風には眠らないのではないかと。異郷で知り合いのマミヤに会えたものだから安心した
のでしょうか」柔らかな声。

「……………」

「私、ずっと考えていたのだけれど。あなたには話しておいた方がよいかと思って」ヘ
ルガの声は改まっていた。

「は。なんでしょう」

「私といっしょにくにを発って、ケストルに入った人たちの事です。男ふたり、女ひと
りの三人。みな外務省のベテラン職員です。彼らは、どうしたのでしょうか」

「その者たちの安否、行方は不明のままです」

ヘルガは言い淀んだ。思い起こしつつ、何事か迷っている。「仕事には慣れている彼
らが、どこかいつもと様子が違っていた。ひどく緊張している、落ち着かない、そんな
感じでした。私の気のせいかと思っていたのですが……。彼らは私の身に起こること
を、前もって知っていたのではないかしら」

「殿下——それは——」

「もしかしたら、彼らはいまだケストル内にいるかもしれない。けれども、それは拘束のためではなくて……」

「なにか取引があったのではと、そうお考えですか!？」

ヘルガはうなずいた。「ある時、気がついたのです。彼らは三人とも、叔父の奥方の血筋の縁者」

レルは自分の握りこぶしを片手でつかんだ。

「僕は——しばらく前からある疑いを抱いていたんです。もしや、エウメロス国内の重要な動向がケストルにもれているのでは——」

106.

ヤハズエンドウの赤紫の花に蜜蜂がやってきて低い羽音をひびかせている草原の中に身を倒して、コタエは青い空を仰いでいる。周囲には誰もいない。ひとりになってこうするのがコタエのいちばん好きな時間。何にも誰にも関わらずに、大地の上でただ植物に囲まれ陽光を浴びるのだ。すると、心身に活力がよみがえってくるのを実感する。低下したエネルギーを充電するための、コタエの瞑想方法だった。

さく、さく、と、草を踏む足音を聞きつける。

瞑想の中に誰かが入って来た。

だれ——？

コタエはゆっくりと身を起こし、足音の来る方へ頭を巡らせる。

——兄上

コタエの、女性にしてはきつい目が和らいだ。兄弟姉妹は数えきれないほど大勢いるし、スクナとはかなり年が離れているけれども、彼はコタエの一番の理解者だった。似た者同士というべきか。弦を張った楽器を背中に背負い、植物の繊維を編んだ帽子を目深にかぶっている。のちの吟遊詩人のようないでたちであり、また吟遊詩人のようなよく響く深い声音を持っていた。

やあ、とスクナは日焼けした面に笑みを浮かべた。

107.

(いかながなされましたか兄上。このようなところへ)

(まったく、つくづく、コタエよおまえは私の妹だ。冒険家だ)

(人は兄上のことを放浪者と言っているようですが) コタエの想念は笑いを含んでいる。

(他人に決めてもらうことではないさ。ところで、こっちはえらいことになっているようだな)

(はい) とコタエは殊勝に応える。(ホシナ族のマミヤを救い出し、そのままくにへ帰る、というわけには、まいらないようです)

(うむ。短時間のうちにホシナ族の娘、さらにダイドラボッチまで探し当てるとは) 感に堪えない様子のスクナである。

(はい。幸運というほかございません……兄上?)

(……実は……すこしばかり、やっかいなことになりそうだ)

(と、仰せられますと?)

コタエは身をしっかり起こし、兄に向き直った。彼は何事か容易ならざる情報を持ってきたらしい。

(国内で獣が異常に増えている)

(——なんと——)

(それもホシナの里に近いところでな。ダイドラボッチがいなくなったことと関係があるのではなからうか)

(そういえば、ふだんは人に寄り付かぬ獣が、ダイドラボッチがいなくなったとたん、人を襲うほど狂暴化したという話を聞いたような)

(うむ……人を襲うような獣を捨ててもおけず、王の兵士を動員して退治に回っているが、周辺の住民の動揺は甚だしい。民は、『敵意を向けられる』という状態にひじょうに困惑している。そういうものと無縁で生きて来たからな。困惑はわからぬでもない。だがコタエよ、困惑以上に私が恐れるのは、その『恐れ』そのものなのだ。民の精神にとってこれほど有害なものはない。恐れは、王の導きも癒しも弾いてしまう。なぜだか

わかろうか。王の導きや癒しは目に見えぬが、恐れは今まさに目の前にある現実の問題だからだ)

(———)

(今のところ民の恐れは狂暴な獣に向けられている。が、やっかいなことになりそうな雲行きゆえ、そなたに伝えておこうと思うてな)

(———どうということですか———)

不吉な影をやどらせる妹の目を、スクナはのぞき込む。

(ホシナ族)

(はあ)

(北からやってきたホシナ族は原住民の民と種族がちがう)

(それで！？ そんな理由で、民はホシナ族を恐れる、と！？ バカな！！ 天候に左右されて植物が不作で、民を飢えさせたくない、王はホシナ族に獣を狩る道具作りと狩猟を許可した。同時にうるち菜という特殊な植物の栽培をも。どちらも原住民の民には不得手なことだったから——)

(その通りだが、民の寿命は短い。世代が交代するうち、過去の事情は歪曲されることもある)

(そんな——！ ホシナ族の人たちと直接、自分で、交わってみれば、彼らのしていることなどわかりそうなものではありませんか！！)

(我々も気がついたのだがね、どうも民は、不確かな情報ほど信じやすいね)

興奮のあまり乱れた呼吸を懸命に整えようとするコタエである。(で。マミヤを国内へ連れてもどるのは待て、と仰せられる?)

スクナは渋い顔でこっくりとうなずく。(彼女の身の安全のためだ。王の意向でもある)

(え。王の?)

(コタエよ、肝心な話はここからなのだ)

(では今までの前置きですか！)

108.

(おまえはホシナ族の、名のいわれを知っているか)

(いえ)

(彼ら自身によると、星に導かれる者、という意味だそうだ。一方、我が国では、黒曜石を天から降った星とみなしていた。ホシナ族が黒曜石の開発を手がけるということは偶然の必然だったといおうか)

(偶然でしょ)

(ドライなやつだなおまえは。この世に偶然などというものはない。すべては必然から起こるのだ！ まあそれは置いといて。もうひとつおまえに聞くが、アマセオを知っているか)

(はあ……一族にそのような名の者がいたような……)

(そうだ、系図の説明は省略するが、我が一族の者だ。この者がホシナ族に近づいておる)

(……なぜ)

(原住の民から糾弾され、恐れられているホシナ族を守ろうとしてのこと)

それを聞いてコタエは吊上げていたきつい目をふと和らげた。だがスクナの次の言葉に声を失う。

(しかし王の一族は違う捉え方をする)

(どういうことですか!?)

(天の理《ことわり》を地上に下ろした国、それが王が統治する我が国だ。天の理念を地上に転写することが王の使命である。私らが属する一族はその王と共に歩み、補佐する立場にある。王の血筋にも深く関与している。それぞれ使命も立場も異なるが、使命の優劣も立場の優劣もない、はずなのだが。世代が交代するうち、かつての事情が歪曲されるのは原住の民だけではないのだ。我らにも起こりうる。王とは天界から唯一認められたという認識だ。その視点からみれば、ホシナ族とは、あり得べからざる存在)

(……………)

(すなわち……アマセオは王に弓引く者)

(兄上——)

(これはホシナ族だけの問題ではない。我が一族が逆賊とされる可能性があるということだ)

109.

コタエが苦し気にうめいている。悪夢にうなされているのか、気の毒に。休む間もなく駆けずり回っていたからな。レルはそう思い、彼のマントにくるまって横になっているコタエに目をやった。

——目の錯覚か？

なにかうすぼんやりしたモノがコタエの傍らに——

レルは反射的に剣に手をかけて立ち上がっていた。そして思わずも叫んだ。「おのれ！ 何者だ！！」

うすぼんやりしたモノは、はっとしたように見えた。

「何者だ！！ そこにいるのはわかっている！！ 正体を現せ！！」

『それ』はゆっくりと立ち上がり、面をレルに向けて言った。「そなた、私が見えるのか？」

「何者かと聞いている！ その人から離れろ！」

剣の切っ先をまっすぐに突き付けられた『それ』は、言われたとおりにした。「私の名はスクナ。コタエの兄」

「コタエさんの？　そこで何をしている！？　コタエさんに何をした！？」

「話をしていたのだ。くにで面倒なことが起こったので、妹に知らせにきた。眠っている者と話すなど、信じられんて？ コタエの幽体と話していたのだ。私も幽体だ。ふつうの人間には見えないはずだが。そなたには見えるのだな。そうか、コタエと共に国外へ出たのは、そなたか。コタエは強い力の持ち主だから、永らく共にいると触発されて物質ではないものを感知できるようになる。だからそなたには私が見えるし、こうして話もできるのだ。その剣も私を斬ることができそうだ。殺気を感じる」

その時になってレルは、幽霊のようなその相手が寸鉄も帯びていないことに気がつく。楽器のようなものを背負った風変わりな男。

「スクナどの、といわれたか」

「いかにも。そなたがお仲間と王の宮殿を訪問中、私は旅に出ている、お目にかかれななんだ。妹が、コタエがそのうちのおひとりと同道したと後で聞いて、なんと無茶なことをと……それで様子を伺いに、寄らせてもらった。コタエの兄、スクナと申す。お初にお目にかかる」

レルは抜き身の剣を引っ込めた。

「エウメロス王国、王室近衛隊、レル・ヴァリスです。ご無礼を」

スクナは改めて礼を取る。コタエのくにの成人男性はたいてい長い髪をとかしつけ、絹の紐できっちり結わえるという髪型をしていたがスクナという男は……ひじょうに野生的に見えた。しかし礼を取るその身のこなしはひじょうに典雅だ。彼はレルの後方のヘルガに目を向けた。「そちらのご婦人にも私がお見えのようだ」

「あの一あたしにも見えるんですけど」

「ぼくにも」

結局見えていないのは操縦士だけだった。

110.

「あの、スクナさん、くにで起こった面倒なことって？」

「うむ、まあ、なんというか、我々の身内同士のごたごたというかね。マミヤ、君らが心配することではないのだよ。ただ、そのごたごたのとばっちりを避けるために、帰国の頃合いを見計らった方がよいと、コタエに伝えに来たというわけだ」

スクナは説明しながらダイダラボッチを眺める。彼もまた騒ぎを聞きつけて目を覚ましてしまっていた。

「しかしこれはまたなかなか。よい体格であるな」

「スクナさん、この子をくにまで運んでもらえませんか!？」

「いいとも」

あまりに事もなげな返事だったのでマミヤだけでなく一同揃って黙ってしまった。

「ほ、ほんとうに!？」

「うむ。しかし私一人では無理だ。何人か人手がいる。増援を呼ばなくては」

そう言ったままスクナはその場に座り込み、目をつむって沈思黙考状態に入ってしまった。通信中、ということらしい。やがて顔を上げて言うには、「人手が揃うまで二日ばかりかかる。それから帰国するのにまた同じくらいかかるが、五日目には元いた場所に帰っているだろう。なに、心配はいらない。私が責任を持つ」

「ありがとう! ありがとうありがとうありがとうありがとうありがとう!! ありがとうスクナさん!!」

「いやなに」

スクナにしてみれば、ダイダラボッチを元に戻せば獣の状態も元に戻るだろう、ということは此度のごたごたの原因が無くなるわけだから、一刻も早く手を打ってしまおう、という算段だった。しかしそれはともかく、アマセオとホシナ族の関係まではさすがに保証できないからそれは黙っていた。

「スクナさん、ひとつお聞きしたいんですが」、とレル。「ダイダラボッチとは、何者なんですか」

「……ダイダラボッチとは、古い種族の亡霊、あるいは、精霊」

「亡霊？」「あるいは……」「精霊？」

「彼は今そこにいる。エネルギーとしてそこにいる。目に見える形を作っているのは我々なのだよ。つまり彼我《ひが》の関係が彼の性格を決めるのだ。

「マミヤよ、そなたはダイダラボッチが何を食べて生きているのか不思議に思っていたね。答えは、何も、だ。精霊である彼に食べ物は必要ないのだよ。

レルもヘルガも食い入るようにスクナを見つめている。彼らはいつの間にか互いの手を取り合っていることにも気づかずに、スクナを見つめている。

巨人族の肉食性は絶対的なものではない。その認識はまさに、暗夜に差し込んだ一条の光だった。王国の首都を占拠している連中に加わろうと、一万超の部隊が移動中なのも事実ではあるけれども。

111.

「ぜんぜん、眠った気がしないわ」寝起きのコタエは目の下に隈を作っていた。

「すまなかったよコタエ。まあ、これをお食べ。腹がくちれば機嫌も、いや、具合も良くなるろう」

夜の開けた高山は空気が澄んでさわやかだ。朝日のさすなだらかな山の中腹に朝露をしのぐために毛皮の敷物が敷かれ、お膳が並び、椀から湯気があがっている。妙な光景ではある。スクナがなにもない空間から取り出したもので、引き寄せの術とかいうらしい。

「感謝いたしますスクナさま。このご厚意は決して忘れませんわ」

「いやなに。姫君のお口に合えばさいわい」

「いいおだし、つかってますね」

「宮殿の調理場から拝借したからね」

「あれ、イリチャ、卵焼き食べないの？」

「ああ……よかったらマミヤにあげる」

レルは物思いに沈む。巨人族の暴力性と肉食性とは、人間によって付け加えられたものだろうとスクナは言った。それらは彼らの本質ではない、しかし仮にそれが事実であったところで現実はなにも変わらない。巨人の軍隊に人間は太刀打ちできまい。誰かに助けを求めようにも、肝心の黄金門市の皇帝本人が巨人に追われて逃げ込んできている始末、ネウトラ評議会本部とは連絡もつかない。そういえば、ヤスウはどうしただろう。

ひょっとしたら母国は滅亡の際にあるかもしれない。エウメロス内部の情報がケストル側に筒抜けならば——父はバイスロイを信用していなかったが、まさか自国内に内通者がいようとは——いま己のしていることには何の意味もないかもしれない。その認識は底なしの虚無へ通じていた。

それでも。墜落する機から非常食を持ち出すこともできず、昨夜は誰がこんな朝食の光景を想像できただろうか。世の中捨てたもんじゃないと、彼は思うのだ。

「近衛隊長どの。——近衛隊長どの！」

「は」

見れば操縦士が彼の傍らで片膝をついている。

「聞こえませんか、あの音。友軍機のエンジン音です！ 搜索隊が来てくれたんですよ！！」

スクナの下にもすでにダイドラボッチを運ぶ人手が集まりつつあった。ほんの数時間前に行われた援軍の要請だったが、反応は早かった。山の精霊の不自然な消失が多くの混乱を招いていることはもはや明白だったのだ。

「では兄上。ダイドラボッチをお頼みしますぞ」

「うむ。おまえはやはりこちらに残るのだな」

「はい。マミヤの帰国がかなうまでは」

そのマミヤはすっかり身軽になったのでイリチャとともにメッサナへ向かうつもりだった。なんといっても、そこにはヒューダーがいるからだ。

「さようなら。おまえ。元気でね」当の彼女はダイドラボッチと別れを惜しんでいる。

「私はエウメロスへ。避難先で治療を待っている人がまだたくさんいるのです」

スクナはうなずき、レルに向き直る。

「人手が揃い次第、我々はダイドラボッチを連れてここから引き揚げ申す。しかし妹は引き続き貴殿の手伝いをしたいと」

「我々の行く手に何が待っているものか皆目見当もつかないというのに。スクナどの、

コタエどのご厚意、ありがたくお受けいたしたい」

「できるものなら、もっと手をお貸しできそうなのだが……」スクナは言葉を濁した。

すでに、彼の故郷からダイダラボッチを拉致してのけた者がいる。その者はもしかしたら計り知れない影響力を残していったのかもしれない。

第六章 『脱走巨人』

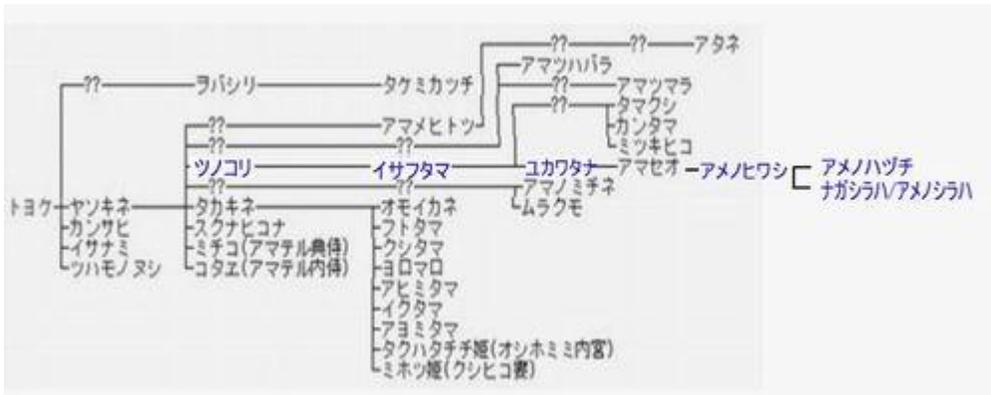
第七章へ続く

第六章のあとがき

ホシナ族の黒曜石鉱山のモデルになっている場所は今も星の名がつく地名がいくつもあるところ。それで後付けみたいに星に関する信仰を調べていたのですよ。そしたら、天津甕星神という神様を見つけました。

日本書紀・神代 下の段・『アシハラノナカツクニ平定』に、タケミカツチ&フツヌシに最後まで抵抗した香々背男神（カガセオ。または天背男命アマセオ）という神がいて、建葉槌命（タケハヅチ。または天羽槌雄神アメノハヅチ）が派遣されて討伐した、という話があります。討たれた香々背男神は『天津甕星神アマツミカボシ』として祀られたそう。ちなみに古事記にこの話はありません。

第六章本文では、系図を説明するとややこしいから省略いたしました。こういうことなんです。ええ。ええ。



系図自体は『ホツマツタエ解説ガイド<https://gejirin.com/index.html>』様のもので、（コンテンツ引用・転載する場合は引用元を明記、リンクを貼ること。特に連絡は不要、とのことなので連絡差し上げておりません）若干、ミネムラが手を加えています。青文字の部分。

本文中の登場人物スクナとコタエの兄妹はあくまで架空存在、この系図は参考にさせていただいているだけです。

『アマセオは カンミ（ヤソキネ）の玄孫 タマクシは セオのいとこ…ホツマツタエ20文』など、誰と誰がどういう関係かといったことはホツマツタエ本文に明記されているので、系図に齟齬はなく整然、ミネムラは信用しています。『??』の部分はホツマ本文では出てこない人たちで、青文字の下は『??』でして、『新撰姓氏録』、『斎部宿祢本系帳』等の資料を突き合せてみたものなのですが、調べれば調べるほど裏がとれない訳がわからなくなってくるわ……頭をひねっても痛くなる

だけなので、いちおう、これでよしとして。

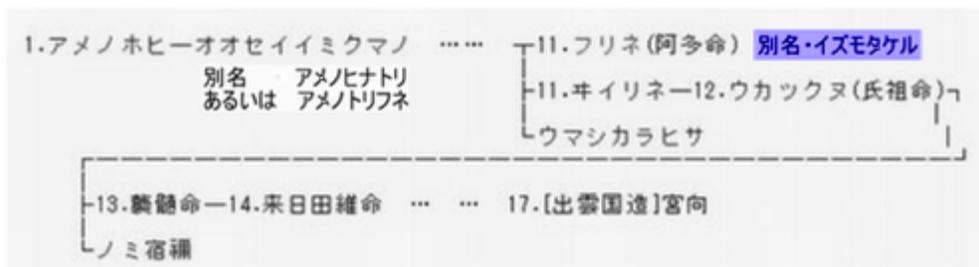
そこで、まあ驚いたことに。この図によればアマセオを討ったアメノハヅチは、アマセオの孫にあたる。しかもみんなみんなタカミムスビの一族じゃありませんか——

話は前後しますが、古事記の『大国主の国譲り』が日本書紀の『アシハラノナカツクニ平定』に当たり、古事記と同じ構図の話が（あくまで同じ構図）ホツマツタエ10文です。

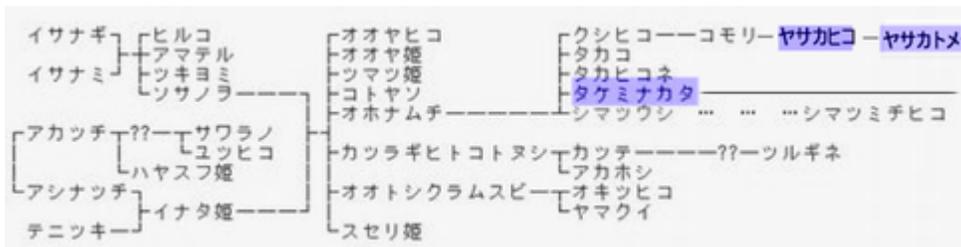
ホツマツタエでのアマセオはクシタマホノアカリがアシハラナカクニへ赴く際のお供の一人として（記紀ではニニギノミコトが高千穂へ赴く、いわゆる天孫降臨の32名の武官の一人）名前が出てくるのみ、でしてね。それでも名前が残っているということはエリート中のエリートだったということかと。スクナたちの兄弟は千五百人いたそうですから。

同族が討たったことは、本人にも同族内にも不名誉なことがあったのではないかな……ということから、第六章の話と相成りました。急きょ取り入れたので今後どうなるやら……ああ頭痛が～

さらに性懲りもなくあれこれ調べてるうち、ますます頭痛が痛くなるような話がでてきたので一応、系図だけ載せておきますけれども、



アメノハヅチの父・アメヒワシは、伊賀にて伊勢津彦なる人物を平定。伊勢津彦は風波に乗って信濃-諏訪へ去ったという。『伊勢津彦なる人物』は実は出雲振根フリネ、別名：出雲建子命イズモタケルといって、出雲の神主。（『大国主の国譲り』で天から派遣されたものの出雲に居ついてしまったアメノホヒとその息子の子孫）。



アメヒワシは伊勢の神麻績機殿神社に祀られていて、主神は天八坂彦ヤサカヒコ。この人スサノオオオナムチの子孫で（おっと。お父さんのコモリはニニキネ・ホオテミ・ウガヤの3代に渡って大物

主を務め、また医者 of 元祖的存在でもある。大物です)、その娘のヤサカトメ姫はタケミナカタ (←古事記とホツマでは、出雲から諏訪へ逃げた) の奥さん。

え～、『風土記逸文・伊勢国』における伊勢彦の言動は出雲でのタケミナカタそっくりで…迷宮のラビリンスみたいな話でしょ…しかしここまで来るとアマセオは関係ないですねえ。

まあついでに、アメノハヅチ、アメヒワシは武神ではなくて機織り神として祀られています。アマセオはアシハラナカクニの謀反を防ぐ役目を負っていたというので、やっぱり武官だったと思われま

す。

さて、いきなり出て来て巨人をなんとかしてくれそうなスクナ様ですが、ホツマツタエによれば6代タカミムスビ・ヤソキネの子で、千五百人の兄弟姉妹の中では落ちこぼれだったといます。オオナムチと共に病人を癒し、田畑から害虫・害鳥・害獣を払うなど、民に尽くし、後には三弦琴を背負って諸国を巡り歩いたとのこと。

いや、長いあとがきになってしまって、こんなとこまで読んでいただいて恐れ入ります。今回いちばん手間取ったのがあとがき、次に表紙、本文は三の次だったりして。なにやってんだか。さて！ 次の章はメルノの話です。

2022年3月15日 記

奥付

Salamander in the circle

第六章 脱走巨人

2022年3月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[月とサカナ](#)」

「[イラストAC](#)」

「[パブリックドメインQ](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
